

「摂氏 51 度、酷暑の北インドを往く」

宮原 豊 (9 組)

筆者は 2001 年 12 月～2005 年 9 月までジェトロ・ニューデリー事務所長としてインド駐在、その後 2007 年、2013 年に北インドを再訪したものの、用務のみの 2～3 日の短期滞在でした。昨年 7 月から事務局長として勤務している公益財団法人日印協会の仕事で、5 月中旬、熱波に見舞われ 60 年振りに最高気温を更新し、摂氏 51 度を記録したラジャスタン州を含む北インド(デリー準州、ハリヤナ州、ウッタラカンド州、ウッタラプラデシュ州)を訪問しました。本稿は同協会機関誌「月刊インド」(2016 年 6 月号)に投稿したものを本 HP 用に改訂したものです。インドの急激な変貌を感じていただければ幸いです。

《爆発的な発展を続けるグルガオンとグレートノイダ》

ニューデリーは 2000 年代のインド経済の拡大・発展とともに、市域を南にどんどん広げ、ついにデリー州を越えてハリヤナ州グルガオン市一帯が経済産業の中心地になっている。元々の中心地であるかつての“東洋一の都”コンノート・プレースも老朽化した建物が多くなったとの感否めない。しかし、デリーの中心街としてまだ賑わっているし、あちらこちらで再開発の工事が進められているので、いずれまたデリーのビジネス・センターとして再興されることが期待される。

デリー・メトロ(地下鉄)がデリーの変貌に果たした役割は大きい。2002 年に第 1 工区が完成し、部分開通したが、今では東京の地下鉄網よりも総延長距離が長くなっている。



日本の円借と技術協力で推進されたプロジェクトである。価格面から車両建造は韓国企業が受注したものの、電気系統等々は日本の先端技術が中枢を占めている。グルガオンまでの延長線は早くから着手された。

筆者のように 10 年前にデリーを離任した者には、話には聞いていたものの最近のグルガオンの爆発的な変化には目を見

開かされる。2000 年代前半は、南ニューデリーの遺跡クトプミナールからグルガオンに入ると、ぽつんと立つ Bristol ホテルが先ず目に入り、その後 MG ロード沿いに近代的なショッピングモールが徐々に建ち始め、ゴルフ・コース・ロードを行くと高層コンドミニアムが眼前に迫って来た（しかし、居住者はまだ多くはなかった）。メトロもなかった。NH8 を少し南に進むと左側に見える Signature Building は、その名前の通り当時の姿が鮮明に脳裏に刻まれている。



南に延伸するグルガオンから北方を望む



日本人学校の新校舎とスクールバス



グレートノイダの景観 (Jaypee
ゴルフ場のクラブハウスから望む)

デリー首都圏 (NCR : National Capital Region)における日本人コミュニティの生活の中心地は南ニューデリーからグルガオンに移っている。NCR に在住する日本人は 4,000 人超であると推定されているが、グルガオンに半数近くが居住している。NCR の日本人会会員は約 2,300 人、ニューデリー日本人学校の生徒は 280 人を超え、幼稚園児を含めると 360 名以上の規模で運営されており、スクールバスは 14 台のうち 8 台がグルガオンの各地区を回っているとのこと。2000 年代前半までは、日本人学校の生徒はなかなか 100 名に達せず、幼稚園児を含めて 120 名程度であった。

ヤムナ川の東側、UP 州のグレートノイダを視察した。ヤマハやホンダ (4 輪) の工場のある辺りであるが、立派な道路が整備され、メトロも延伸工事中、Jaypee ゴルフ場 (筆者はこのメンバーだった) の周辺は高級住宅街となっていた。90 年代に NRI(在外インド人)向けに発行した外貨債権の償還期限を前にして 2000 年頃に区画整理し、売り出された広大な投資物件 NRI タウンもすっかり高級住宅街になっていた。

ちなみに、全インドにおける日系進出企業数（2015年10月1日調査）は1,229社、そのうち北インド NCR は 542 社で、グルガオンのあるハリヤナ州が 305 社、デリー145社、Greater Noida のある UP 州 46 社、ニムラナのラジャスタン州 43 社となっている。インドの他の集積地として、ムンバイ市のマハラシュトラ州 203 社、バンガロール市のカルナカタ州 190 社、チェンナイ市のタミルナド州 192 社、アンドラ・プラデシュ州 10 社、アンドラ・プラデシュ州から分離したテランガナ州 23 社（広大な新工業地区であるシリシティのある）である。

《進出企業の経営戦略と税務・労務》

今回訪問した日系進出企業の工場 5 社を訪問した。Yakult はハリヤナ州の北部ソニパット、他の 4 社（Dainichi Color、Unicharm、NSSI、Taiyo）はラジャスタン州のニムラナ日本企業向け工業団地に立地している。インドは税務、労務が重要で、現地社長はその上に庶務的業務（つまり雑用）に振り回されることが多いと、これは今も昔も変わらない。各社を訪問して、特にインドでビジネス展開するためにはまずは製品の市場性や製造技術に優位性を有することの重要性をあらためて教えられた。

例えば、Yakult はインドの消費者に健康食品としての価値が広く認知されてきており、Dainichi Color は他社とは違う塗料のコンパウンダー技術（混ぜるノウハウ）で強みを発揮し、NSSI は鉄鋼板専門業者としての材料調達とプレス技術、Unicharm は今までインドになかった高品質の商品を提供して消費者に受け入れられており、Taiyo はトラクター用耕耘爪のデザインと強度（材料と熱処理）に優位性のある技術を有しているという。各社とも独自技術やノウハウの活用と保全をインドにおける経営戦略の根幹としている。

既視感に襲われたのが税務問題。ラジャスタン州政府開発公社（RIICO）から過去に遡及しサービス税を支払うように要求される可能性があるという。これは RIICO の責任であり、入居企業に対して過去に遡って延滞金を課すのは理不尽であろう。この日ラジャスタン州の気温は 51 度を記録した。気温だけでなく、進出企業現地社長も相当熱くなっていた。



ヤクルト工場で岩間工場長（右）と筆者
（この日の外気温は摂氏 47 度であった）



ニムラナ日本企業向け工業団地

ニムラナ日本企業向け工業団地は 8 年ほどの歴史であるが、現在 46 社入居している。日本人社員は 210 人（2013 年は 350 人いた）、インド人労働者は全社合わせて 10,000 人ほど。神経を使うのは労務管理と人材育成である。デリーとムンバイを結ぶ主要幹線 NH8 の反対側には一般（インド企業等）向けの工業団地がある。近隣地区だけでは労働者が集まらないので、人材をインド全国各州に求めて採用しているとのことである。問題は定着率であり、また労働問題が起こらないように日々神経を使っている様子がうかがえた。



トラックの往来多忙な NH8。外気温 51 度。

《環境問題に関連して》

既視感と言えば、この冬の間も空気汚染（PM2.5）に悩まされ、デリーでは 2000cc 以上のディーゼル車の登録を止めるとの最高裁命令があった。これは 2003 年頃全てのディーゼル車の営業車（オートリキシャ、タクシー、バス等）の燃料を CNG に変換するようにと、スクールバスさえも走行ストップさせた最高裁命令を思い起こさせる。最高裁の役割が日本とはかなり異なる。空気浄化を求める市民からは拍手喝采だが、エンジン転換だけさせられて数少ない CNG スタンドを幾重にも取り囲んで毎夜何時間も待たされるオートリキシャの運転手が最大の被害者であった。CNG スタンドが十分に整備されるまで半年くらいかかった。ちなみに、現地トヨタの主要車種イノーバはディーゼル 2500 cc であるが、対応を迫られている。

《水問題は最大の問題であろう》

Times of India（3 月 21 日）紙面にラジャスタン州 Vasundhara Raje 首相の投稿記事がある。「水は生活に最重要なもの。ラジャスタンは全インドの国土面積の 11%、人口の 6% を占めるが、水資源は 1% しかない。インドは地下水（大地に降り注ぐ降雨が浸透したもの）に依存しているが、1882 年に制定された地役権法で私権が守られ、全体として十分に水源の情報が把握されていない。現在全インドで 16,000 ヶ所の井戸が観測対象となっているが、モバイル技術の活用で 3,000 万ヶ所の観測が可能。女性の水汲み労働からの解放と言う人道的な観点からも、ラジャスタン州は 3,529 村の水の自給を目指している。雨水の多くは地面に浸透し、貯水して活用されるが、25% は流失している。国民大衆による運動として水資源保全に取り組まなければならない」という趣旨である。



アンベール城のプール

Raje 州首相はさすが乾燥地帯（砂漠）のマハラジャの末裔（お姫様）だと認識も新たに、ニムラナ訪問の後ジャイプールまで足を延ばした。NH8 から見る限りは、摂氏 50 度の気候の中でも緑の畑と青々した低木が続いている。インドは、雨期（7 月～9 月）、乾期（10 月～3 月）、そして暑期（4 月～6 月）に分けられるが、この酷暑期に乾燥地帯のラジャスタンに緑があるというのは、ムガル帝国の時代から山塊一体の雨水を

最大限活用してきたアンベール城の水源管理のノウハウが今に活かされているのかもしれない。インドでは今も雨水管理は厳しく行われている。水資源に恵まれた日本は雨水の活用についての認識は低く、ほとんど川から海に流しているのだろう。

ラジャスタンとは対照的に、ヒマラヤを水源とするガンジス河の水流に恵まれる聖地ハリドワールとその上流のリシケシュを訪ねた。UP 州北部からハリドワールのあるウッタラカンド州にかけての全域に、植樹された高木が立ち並び、農業の盛んなことがわかる。聖地リシケシュは必ずしも“静地”ではなく、日本の門前町と同様に喧騒に包まれる。ただ夜明けの時だけは静寂で、その時間にガンガに沐浴し、瞑想する人々の姿にやはり厳かな雰囲気が漂う。リシケシュは 2 年前のモンスーンの時期に大雨に見舞われ、ガンジス河の水位が上がり大洪水となったそうだ。インドでは降る年は降りすぎるし、降らない年は大干ばつ、降雨は年により、また地域により不安定であるので、雨水管理、地下水保全が重要である。農業用水、工業用水、生活用水のどれをとっても、水資源の確保と管理は今後の重要課題であることは間違いない。



ガンガの上流 聖地リシケシュのガート